

名詞起源動詞の形成法

松浦 高志

1 はじめに

たとえば *árāti-* 「敵」に *-yá-* を付けて名詞起源動詞 (denominative) をつくる時、本来は **arātyāti* となるべきであるが、*arātīyāti* 「悪意をもつ者になる」(ŚBI.3.2.11) のように、一般に名詞語幹末の *-i-* が延びる。この延長は何らかの類推によるものであるが、何からの類推であるかは意見が一致していない。以下ではどのような説明がなされているかを確認する。また名詞起源動詞以外でも、たとえば受動形や願望動詞でも同様に語根(語幹)末の *-i-* が延びることがあるので、それについても述べる¹。

2 名詞起源動詞の本来の形成法

2.1 *uruṣ-yá-ti* 「守る」

ゴンダ『初等文法』§98 (p. 79)では、(§97 「使役動詞」の後で) 「使役の意味をもたずに、*aya-* 活用に従って現在を作る多数の動詞があり；多くは名詞起源の動詞 (Denominative) である」と説明され、*amitrāyati* 「敵対する」(*amitra-* 「敵」), *varṇayati* 「記述する」(*varṇa-* 「色彩」), *corayati* 「盗む」

¹ 本ノートは 2024 年 7 月 1 日の梶原三恵子先生の「印度語学印度文学演習 III」(東京大学文学部)での発表資料をほぼそのまま掲載したものである。なお、執筆に際しては JSPS 科研費 JP22K20016 の助成を受けた。

など、-aya- を含む名詞起源動詞のみの例が挙げられている。

しかし名詞起源動詞がすべて -aya- を含むわけではない。むしろ名詞起源動詞は、印欧祖語では名詞語根（または名詞語幹）の零階梯に $*-jé/ó-$ > -yá- を付けたものであった可能性が高い²。記号を用いて表すと ‘R(Ø)-jé/ó-’ のようになる。なお、R は語根の略で()内は（印欧祖語での）階梯を表し、e/ē/o/ō または Ø（零階梯、LIV² では z で表す）が入る。 $*e/o$ は語幹形成母音（thematic vowel、次の音によって e か o かが決まる）であり、サンスクリット語では a または ā で現れる。

たとえば *uruṣ-yá-ti* 「守る」（MW s.v. *uruṣya-*, cf. Pā VI.3.133）は、名詞 *várivās-* 「幅広さ」からつくる名詞起源動詞であると説明される。意味の点では、「幅広さを求める」 > 「人を幅広さ／安全さの中へと持ち込む」のように敷衍されたと説明される。まず、*várivās-* は名詞（形容詞）語根 *ur-u- < *h₁urh_x-u-* 「幅広い」から派生した名詞である。二つ目の -u- は Caland 接辞であるので、ほかの単語を派生させるときにこれを取り去ることがある³。 $*h₁urh_x-$ は最後に喉音を含むので、これを *guṇa* 階梯にして名詞接辞 -vas- < $*-uos-$ を付けると、その喉音が i で現れて *várivās-* になる。

さて、*várivās- < *h₁uérh_x-uos-* 「幅広さ」の語根と接辞を零階梯にすると $*h₁urh_x-us-$ になり、これに $*-jé/ó-$ を付けると *uruṣ-ya-ⁱ* ができる（この場合、後に母音が続くので $*h_x$ は消失する）。なお、MW s.v. *uruṣya-* では、*uru-* に由来する名詞（からつくる名詞起源動詞）としつつも、「vr̥- (1) の不規則な未来形か願望動詞か？」とも説明されている。

2.2 ほかの印欧語での例

² Klingenschmitt, *Verbum*, 149 n. 9; Gotō, *Morphology*, 131–132.

³ 松浦「文法ノート (7) : Caland 接辞」69.

零階梯の名詞に接辞*-jé/ó-を付けてつくる名詞起源動詞は、ほかの印欧語にも例がある。たとえば希 blittō 「蜂の巣を切り出す」は、méli 「蜂蜜」

(語幹は mélit-) を零階梯にして*-jé/ó-を付けた*m_{litjé/ó-}に由来する。ギリシア語では、この ml のような「共鳴音+共鳴音」の組み合わせでは、間にわたり音(発音を容易にするために入る、語源とは無関係な音)が入るので*m_{blitjé/ó-}になるが、語頭ではこの三子音の連続は許されないので、m が落ちて*blitjé/ó- > blittō になる。名詞曲用において méli 「蜂蜜」が零階梯になることはなく、常に語根母音の e が保たれるので、blittō は古形を保存しているということになる。

ほかに羅 sepe*l-iō* 「埋葬する」は*sep-el-jé/ó- 「敬意を払う」という名詞起源動詞であるが、これはサンスクリット語の sa*par-yá*^{ti} 「尊敬する」と比較できる⁴。

2.3 名詞+√dhā 「置き定める」でつくる単語

名詞+√dhā 「置き定める」でつくる単語でも同じ現象が起こっていると考えられる⁵。たとえば medhá 「精神的な活力, 知性, 知恵」は, mánas- 「心, 知力」を零階梯にして√dhā 「置き定める」を付けて *m_{ns-d^héh₁-} > *masdhá > medhá (Av. Maz-dā-) のようにつくられたと考えられる。なお, 古い時代に(閉鎖音の前で) *as であった音は, サンスクリット語では e で現れる。

3 名詞起源動詞の形成法

3.1 教科書での説明

VGS §175 (pp. 205–207) では, 名詞起源動詞の形成法は次の四つに分類

⁴ EWAia s.v. sapary, cf. √sap 「従う, 尊敬する, 仕える」等。

⁵ Gotō, *Morphology*, 132.

されて説明されている（例はそれぞれ一つだけに限った）。

- (1) 名詞語幹末の *-i-* と *-u-* は延びる：rayī-yá-「富を望む」(rayí-), ṛjū-yá-「まっすぐである」(ṛjú-) 等。
- (2) 名詞語幹末の *-a-* はふつう変わらないが、延びて *-ā-* になることがあり、あるいは *-ī-* になること、*-a-* が落ちることもある：deva-yá-「神の役割を果たす」、ásvā-yá-「馬を望む」、putrī-yá-「息子を望む」(putrá-), adhvar-yá-「祭式を行う」(adhvará-, adhvarī-yá- もある)。
- (3) 名詞語幹末の *-ā-* は変わらない：gopā-yá-「牧人として働く、守る」。
- (4) 名詞語幹末の子音は変わらない：bhiṣaj-yá-「医者 of 役割を果たす、病気を治す」。

3.2 *-i-* または *-u-* で終わる語根に *-ya-* を付けるとき

-i- や *-u-* で終わる語根に *-ya-* を付けるとき、その語根母音は一般に延びる。また *-ya-* 以外でも、*y-* で始まる形態素 (morpheme) を付けるときにも延びる。たとえば（現在以外の）希求法、祈願法 (precativē), 強意動詞 (intensive), 名詞起源動詞 (denominative), 受動態のときには一般に延びる。これらのうち特に受動態について Kulikov は次の説明を挙げているが、そのうち (i–iii) は否定され、(iv) がもっともよい説明であるとしている⁶。

- (i) C を子音として、^oC_iyá- のように、一音節から二音節になる例 (Sievers の法則による) からの類推。たとえば Criyá- 語幹 (√kr 「作る」) の受動態が kriyá-ⁱⁱ になる場合などが考えられる)。これが *-u-* 語幹にも適用された (Lanman)。ただし *-yá-* を用いる受動態では

⁶ Kulikov, *-ya-Presents*, 8–9; Lanman, 'Passive-stem'; Kuryłowicz, *L'apophonie*, 127; García Ramón, *cēnsēre*, 123 n. 63; Jamison, 'Laryngeals', 215–216, 225; Lubotsky, '-áya-Formations', 101–102 & 102 n. 5 (Kulikov, *-ya-Presents*, 9 n. 18 で挙げられている '112, note 5' は '102, note 5' の誤り)。

Sievers の法則は適用されないので支持できない (Kulikov).

- (ii) TeRi, TeRu > TRi, TRu > TRī, TRū のように「音節が失われることによる二次的な延長」(sekundäre Dehnung infolge des Silbenverlustes) が起こったため (Kuryłowicz). ただしこれは支持できない (Kulikov).
- (iii) 「……の状態である」の意味を付す状態相接辞 *-eh₁- の零階梯が前に付いて, *-h₁-jé/ó- という形態素複合体 (Morphemkonglomerat) をつくっている. 例: śrūyáte (<*kleu-), stūyáte (<*steu-) など (García Ramón). ただし -ya- 現在を, *-h₁- を用いるものと用いないものの二種類に分けることになり, アドホックな解決法である (Kulikov).
- (iv) 短母音で終わる語幹に -yá- を付けてつくる名詞起源動詞からの類推 (Lubotsky が Kulikov に個人的に提案). さらに y で始まる接辞をもつ動詞の形態へこの延長が広まり, 形態素境界を示すための指標 (-ī- のところで一つの形態素が終わっている印になる) の一つとなった (Jamison).

(iv) について, たとえば aśvāyá-^{ti} 「馬を望む」は印欧祖語では *h₁ekuo-jé/ó- であるが, Brugmann の法則により *-jé/ó- の前にある *o は, ā で現れるので, もともと短母音で終わっていた語幹が, -yá- を付けることで延びていると言える. なお, Brugmann の法則とは, 開音節 (母音で終わる音節) の *o は, インド・イラン語派では ā で現れるという法則である. Jamison の言う形態素境界については第 4 節で述べる.

Lubotsky (と Kulikov) の説明は現時点ではもっともよい説明のようであるが, 問題もないわけではない. たとえば, -a- 語幹の名詞からつくる名詞起源動詞は, すべて -ya- の前が延びなければならないが, それについてはこの箇所では説明されていない.

また Kulikov が挙げていない説もある. たとえば Renou は, -īyá- は, putrīyánt- 「息子を望んでいる」のように願望動詞 (desiderative) の意味が

あることがある，と述べているので⁷，おそらく Renou は $\bar{i}y\acute{a}$ - となる名詞起源動詞の由来の一つは，願望動詞からの類推であると考えているようである．願望動詞では，共鳴音の後では接辞として $*-h_1se/o-$ を付けるので， i 語幹の名詞からつくる願望動詞は， $*-i-h_1se/o- > \bar{i}sa^{-ti}$ のようになる．たとえば \sqrt{ci} 「集める」 ($< *k^wej-$) からは， $ci-k\bar{i}\text{-}\acute{s}a^{-te} < *k^wi-k^wi-h_1-se/o-$ ，ほかの共鳴音の例として \sqrt{kr} 「つくる」 ($< *(s)k^wer-$) からは， $c\acute{i}\text{-}k\bar{i}r\text{-}\acute{s}a^{-ti} < *k^w\acute{i}\text{-}k^wr-h_1-se/o-$ (サンスクリット語では， $*rh_x$ は $\bar{i}r$ で現れる)．

4 母音化した喉音の扱い

Jamison, ‘Laryngeals’ では，母音化した喉音がサンスクリット語でどのように取り扱われているか，その中でも特に，サンスクリット語ではふつう $-i-$ で現れる母音化した喉音が，類推によって \bar{i} - と長くなる場合について論じている．

Jamison の議論の一つは，受動態と名詞起源動詞に含まれる $\bar{i}\text{-}ya-$ である⁸． i で終わる語根の受動態と， $-i-$ 語幹の名詞からつくる名詞起源動詞では，その $-i-$ が延びる．たとえば $m\bar{i}\text{-}y\acute{a}\text{-}^{te}$ 「固定された」 (cf. $mit\acute{a}$ -)， $c\bar{i}\text{-}y\acute{a}\text{-}^{te}$ 「集められた」 (cf. $cit\acute{a}$ -) ; $ar\bar{a}\bar{i}\text{-}y\acute{a}\text{-}^{ti}$ 「敵意をもつものとなる」 ($\acute{a}r\bar{a}ti-$)， $ray\bar{i}\text{-}y\acute{a}\text{-}^{ti}$ 「富を望む」 ($ray\acute{i}$ -) などがある．これらの延長は明らかに形態上の理由で行われるものであり， $-y-$ の前に形態素境界があることを示すために延びていると Jamison は述べている．

これは，(零階段の) 語根に含まれる喉音が i で現れるときにも同様に起こる．たとえば $d\bar{i}\text{-}y\acute{a}\text{-}^{te}$ 「与えられた」 ($*dh_3-$)， $dh\bar{i}\text{-}y\acute{a}\text{-}^{te}$ 「置き定められた」 ($*d^h_1-$)， $sth\bar{i}\text{-}y\acute{a}\text{-}^{te}$ 「立てられた」 ($*sth_2-$) ; $mah\bar{i}\text{-}y\acute{a}\text{-}^{te}$ 「喜ばしい」 ($*me\acute{g}$ -

⁷ Renou, *védique*, §359 (p. 301–304).

⁸ Jamison, ‘Laryngeals’, 215–216.

h₂-), janī-yá-^{ti}「妻を望む」(*g^wen-h₂-) などである。

Jamison は語末音節に含まれる喉音についても論じている⁹。C を子音, # を語末として, 本来は *-h_xC# > -iC# になるはずであるが, 実際にはほとんど *-h_xC# > -iC# になると述べている。すなわち, 語末にある子音の前の喉音が延びる, ということである。たとえば語根現在の過去 (imperfect) では abravīt < *(h₁)e-mleu_h2-t (√brū), 語根アオリストでは agrabhīt < *(h₁)e-g^hrebh₂-t (√grabh), s アオリストでは asāvīt < *(h₁)e-seu_h2-s-t (√sū) のような例がある。

凡例

希 ギリシア語.

羅 ラテン語.

Av. Avestan (アヴェスタ語).

EWAia Mayrhofer, *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen*.

*LIV*² Rix (Hg.), *Lexikon der indogermanischen Verben*².

MW Monier-Williams, *Dictionary*.

VGS Macdonell, *Vedic Grammar for Students*.

ヴェーダ文献等の略号

Pā Pāṇini.

ŚB Śatapatha-Brāhmaṇa.

参考文献

Balles, I., *Die altindische Cvi-Konstruktion. Form, Funktion, Ursprung* (Bremen: Hempen, 2006).

——— ‘The Old Indic cvi Construction, the Caland System, and the PIE Adjective’, in: J. E. Rasmussen and T. Olander (eds), *Internal Reconstruction in Indo-European: Methods, Results, and Problems* (Copenhagen:

⁹ Jamison, ‘Laryngeals’, 220–223.

Museum Tusculanum Press, 2009), 1–15.

García Ramón, J. L., ‘Lat. *cēnsēre*, got. *hazjan* und das idg. Präsens **k̑éns-e-ti* (und **k̑ns-éje-ti*?) ‘verkündigt, schätzt’, Stativ **k̑ns-eh₁-* ‘verkündigt, geschätzt sein/werden’”, in: G. Meiser (Hg.), *Indogermanica et Italica. Festschrift für Helmut Rix zum 65. Geburtstag* (Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck, 1993), 106–130.

Gotō, T., *Old Indo-Aryan Morphology and its Indo-Iranian Background* (Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2013).

Inslar, S., ‘Vedic Denominatives to Thematic *a*-Stems’, in: A. Lubotsky (ed.), *Sound Law and Analogy: Papers in Honor of Robert S. P. Beekes on the Occasion of his 60th Birthday* (Amsterdam: Rodopi, 1997), 103–110.

Jamison, S. W., *Function and Form in the -āya-Formations of the Rig Veda and Atharva Veda* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1983). https://digi20.digitalesammlungen.de/de/fs1/object/display/bsb00040600_00006.html

——— ‘The Quantity of the Outcome of Vocalized Laryngeals in Indic’, in: A. Bammesberger (Hg.), *Die Laryngaltheorie und die Rekonstruktion des indogermanischen Laut- und Formensystems* (Heidelberg: Winter, 1988), 213–226.

——— ‘Another, Unrecognized, *cvi* Construction in the Rigveda, with Cautionary Remarks on the Supposed Origin of the Construction’, in: C. T. Fleming, T. L. Knudsen et al. (eds), *Science and Society in the Sanskrit World*, Sir Henry Wellcome Asian Series, Vol. 21 (Leiden: Brill, 2023), 89–103.

Klingenschmitt, G., *Das altarmenische Verbum* (Wiesbaden: Reichert, 1982).

Kulikov, L., ‘Length Vacillation -*īy*-//*-iy*- and Related Phenomena in Vedic’, in: G. Meiser und O. Hackstein (Hgg.), *Sprachkontakt und Sprachwandel. Akten der XI. Fachtagung der Indogermanischen Gesellschaft, 17.–23. September 2000, Halle an der Saale* (Wiesbaden: Reichert, 2005), 295–317.

——— *The Vedic -ya-Presents: Passives and Intransitivity in Old Indo-Aryan* (Amsterdam: Rodopi, 2012).

- Kuryłowicz, J., *L'apophonie en indo-européen* (Wrocław: Zakład Imienia Ossolińskich, 1956).
- Lanman, C. R., 'The Sanskrit Passive-stem', *Journal of the American Oriental Society*, 40 (1920), 199.
- Lubotsky, A. M., 'The Vedic -áya-Formations', *Indo-Iranian Journal*, 23 (1989), 89–113.
- Macdonell, A. A., *A Vedic Grammar for Students* (Oxford: Clarendon Press, 1916).
- Monier-Williams, M., *A Sanskrit-English Dictionary* (Oxford: Clarendon Press, 1899).
- Renou, L., *Grammaire de la langue védique* (Lyon: IAC, 1952).
 ——— *Grammaire sanscrite²* (Paris: Adrien Maisonneuve, 1975).
- Schaefer, C., *Das Intensium im Vedischen* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1994).
- Whitney, W. D., *Sanskrit Grammar²* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1889).
- 梶原三恵子 (編) 『インド語インド文学拾遺 2024』 (東京大学文学部インド語インド文学研究室, 2024).
- ゴンダ, J. 『サンスクリット語初等文法』 (新訂版) 辻直四郎校閲, 鎧淳訳 (春秋社, 1989).
- 松浦高志 「サンスクリット語文法ノート(7) : Caland 接辞」, 梶原 (編) 『拾遺 2024』 67–76.
- 「サンスクリット語文法ノート(8) : 延長要素 -i- を含む語根について」, 梶原 (編) 『拾遺 2024』 77–81.
- 「サンスクリット語文法ノート(10) : grbhī́ta-」, 梶原 (編) 『拾遺 2024』 85–90.
- 「サンスクリット語文法ノート(12) : √pā 「飲む」 の使役相 pāyáti について」, 梶原 (編) 『拾遺 2024』 99–104.